05

東海地区における大学生の衣生活に関する実態調査

The Research and Inverstigation of College Students' Clothing Habits in the Tokai area

ファッション造形学科・助教
Department of Fashion Design・Assistant Professor
鷲津 かの子 *Kanoko WASHIZU*

ファッション造形学科・准教授
Department of Fashion Design・Associate Professor
水嶋 丸美 *Marumi MIZUSHIMA*

ファッション造形学科・非常勤講師
Department of Fashion Design・Part-Time Lecturer
宮本 教雄 *Norio MIYAMOTO*

東海学園大学・教授
Tokaigakuen University・Professo
伊藤 きよ子 *Kiyoko ITO*

ファッション造形学科・教授
Department of Fashion Design・Professor
安藤 文子 *Fumiko ANDO*

1 はじめに

衣服は着用に伴い機能が低下し、形態も損なう。しかし、手入れをすることで、購入時の状態を長く維持することもできる。

近年では、購入した衣服を長期間着用しない傾向もみられる[1]が、このような傾向は深刻な環境問題に繋がる。衣服を使い捨てのように扱う傾向や、死蔵させている要因として、衣服の低価格化や流行の短サイクル化が挙げられるが、衣服管理や衣服補修の知識不足もその一因と考えられる。

衣服の管理・補修に関する調査はこれまでも行われている[2], [3]が、ファストファッションが台頭する現代では、大学生の衣服に対する取扱いは大きく変化しているものと思われる。また、高等学校までの衣服分野の学習内容が減少している現状の中で、購入後の衣服に対する管理・補修の実態も、多様になっていると考えられる。

そこで本調査では、東海地区で学ぶ大学生が、購入後の衣服をどのように管理・補修しているか実態調査を行った。

2 方法

調査対象者は、愛知県または岐阜県の大学、短期大学に通う大学生579名（18歳～24歳）とし、2015年11月から12月にかけて集団質問紙調査を実施した。有効回答数は576(女性372、男性203、未記入1)である。

調査項目は、衣服管理に関する項目として、①洗濯の実施状況、②クリーニング店の利用状況、③クリーニング店を利用する季節、④クリーニング店を利用するアイテム、⑤アイロンがけの実施状況、⑥家庭でアイロンがけをするアイテムの6項目を取り上げた。また、衣服管理に関連する用語の認知度と、その実施状況についても調査した。

衣服補修に関する項目としては、①衣服補修用具の所有状況とその内容、②補修が必要な場合の対応方法、③中学校での衣服分野実習の有無とその内容、④高等学校での衣服分野実習の有無とその内容、⑤高等学校までに学校や家庭で学んだ技術、⑥高等学校までに学校や家庭で学んでおきたかった技術の6項目を取り上げた。また、衣服補修に関連する用語の認知度と、その実施状況についても調査した。

これらの調査内容に加え、フェイスシート項目として、①性別、②年齢、③同居状況の3項目を取り上げた。

回答方法は、各項目で該当するものを選択させる方法で行った。

衣服管理に関する項目のうち、クリーニングに出すアイテムでは、「コート」「スーツ」「ワンピース」「ジャケット・ベスト」「パンツ・ス

カート」「シャツ・ブラウス」「Tシャツ・カットソー」から当てはまるものを全て選択させ、その他の場合は自由記述欄に記入させた。また、家庭でアイロンがけをするアイテムでは、「コート」「スーツ」「ワンピース」「ジャケット・ベスト」「パンツ・スカート」「シャツ・ブラウス」「Tシャツ・カットソー」「パジャマ・ネグリジェ等」「肌着・下着」の9項目を提示して当てはまるもの全てを選択させ、その他の場合は自由記述欄に記入させた。

さらに、衣服管理関連用語の認知度と実施状況では、「衣替え」「虫干し」「のりづけ」「しみ抜き」の4項目を取り上げ、用語を知っているか、実施しているか尋ねた。

次に、衣服補修に関する項目のうち、補修が必要な場合の対処方法では、「ボタンやホックがとれた場合」「ファスナーが壊れた場合」「裾上げや丈直しが必要な場合」「裾がほつれた場合」「穴があいた場合」「サイズが合わなくなった場合」「落ちにくいシミや汚れが付着した場合」の各場面について、対応方法を選択肢から選ばせた。また、高等学校までに学校や家庭で学んだ技術および学んでおきたかった技術については、「ミシンがけ」「ボタンつけ」「ホックつけ」「まつり縫い」「ファスナーつけ」「裾上げ」「シミ抜き」の7項目を提示し、当てはまるもの全てを選択させ、その他の場合は自由記述欄に記入させた。

さらに、衣服補修関連用語の認知度と実施状況では、「まつり」「ボタン付け」「かけつぎ」の3項目を取り上げ、管理用語と同様に調査を行った。

調査結果をもとに、χ^2検定を用いて項目間の関係を探った。

3 結果および考察

3.1 衣服管理に関するアンケート調査結果

はじめに、フェイスシート項目についてまとめたものを表1に示した。性別では女性が64.6%、男性が35.2%となり、年齢では19歳が46.7%と約半数を占め、18歳が19.4%、20歳が17.2%の順であった。

同居状況は、親・兄弟（姉妹）と同居が32.6%と最も多く、一人暮らし（寮含む）（25.0%）、親と同居（25.0%）の順であった。

衣服の管理に関する項目として、自分で洗濯をしているか尋ねた結果が図1である。38%の調査対象者が自分で洗濯をしており、親や兄弟と同居であっても、自分で洗濯をしている場合もみられた。また、母親が洗濯をしているとの回答が最も多く、56%であった。

次に、クリーニング店利用の有無については62%の調査対象者が利用していると回答した。クリーニングを利用しない理由としては、最も多く挙げられたのが家で洗濯できる（36%）、次いでお金がかかる（24%）、面倒（16%）という結果であった。その他、自宅の近くにない、家族に任せているので分からないとの回答もあった。

表1：フェイスシート項目調査結果　n=576

性別 (%)	
男性	35.2
女性	64.6
未記入	0.2

年齢 (%)	
18歳	19.4
19歳	46.7
20歳	17.2
21歳	11.5
22歳	4.5
23歳	0.2
24歳	0.2
未記入	0.3

同居状況 (%)	
親・兄弟（姉妹）と同居	32.6
一人暮らし（寮含む）	25.0
親と同居	25.0
親・兄弟（姉妹）・祖父母・その他親族と同居	16.3
その他	0.7
未記入	0.3

専門分野 (%)	
家政系学生	53.5
その他学生	46.5

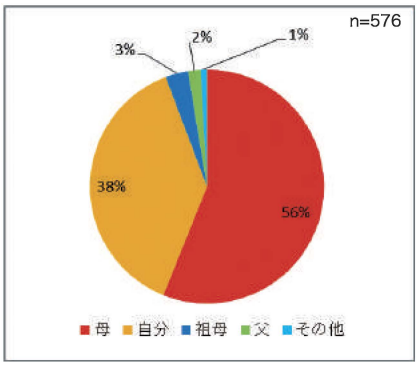

図1：洗濯の実施状況（誰が行うか）

クリーニング店を利用する季節では、春、夏、秋、冬のうち該当するもの全てを選択させる方法で調査を行った結果を図2に示した。最も多く選択されたのは冬（70%）で、次いで春（61%）、夏（41%）、秋（34%）となった。クリーニング店を利用するアイテムとしては、図3に示したようにコート（77%）が最も多く、次いでシャツ・ブラウス（19%）、パンツ・スカート（10%）、その他（9%）、Tシャツ・カットソー（2%）の順であった。

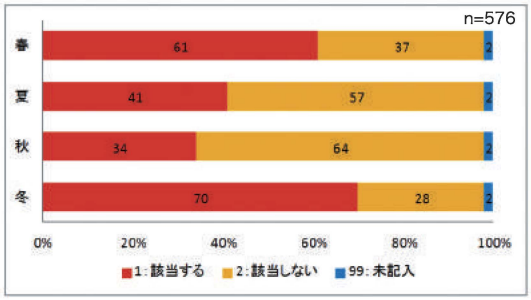

図2：クリーニング店を利用する季節

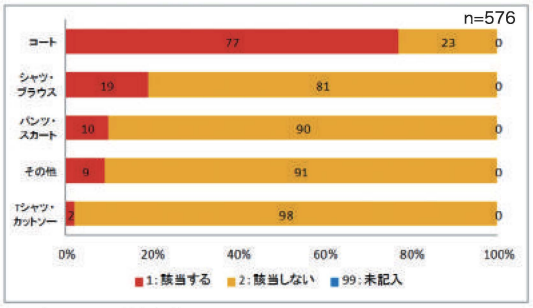

図3：クリーニング店を利用するアイテム

また、調査対象者の居住状況とクリーニング店利用との関係を図4に示した。χ^2検定を行ったところ、有意確率1%で差が認められ、さらに表2の残差分析結果より、一人暮らしの場合はクリーニングの利用率が低く、親・兄弟・祖父母・その他親族と同居の場合はその利用率が高いことが分かった。

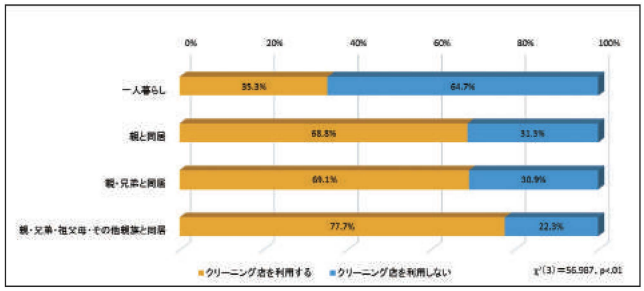

図4：居住状況とクリーニング店利用の有無

表2：居住状況とクリーニング店利用状況の残差分析結果

	一人暮らし	親と同居	親・兄弟と同居	親・兄弟・祖父母・その他親族と同居
クリーニング店を利用する	-7.4**	1.8	2.3*	3.3**
クリーニング店を利用しない	7.4**	-1.8	-2.3*	-3.3**

衣服へのアイロンがけについて尋ねた結果が図5である。48%と約半数が自分でアイロンがけをしており、そのアイテムはシャツ・ブラウスが81%と最も多かった。その他、パンツ・スカート、Tシャツ・カットソーへのアイロンがけも30%程度行われていた。

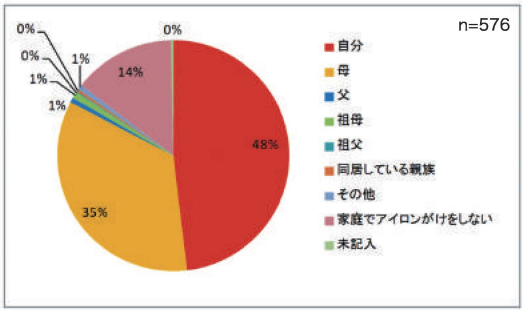

図5：アイロンがけの実施状況

また、洗濯とアイロンがけ実施との関係を図6に示した。χ^2検定を行ったところ、有意確率1%で差が認められ、自分で洗濯をしている場合はアイロンがけも自分で行うことが多かった。

衣服管理関連用語認知度の調査結果が表3である。衣替え、しみ抜きについては90%以上の調査対象者が知っていると答えたのに対して、のりづけは44%、虫干しは23%と認知度が低かった。

衣服管理の実施状況については表4に示した。衣替えは85%と高く、調査対象者の多くが実施していた。その他、しみ抜き(43%)は約半数程度、のりづけ(7%)、虫干し(6%)の実施状況はわずかであった。

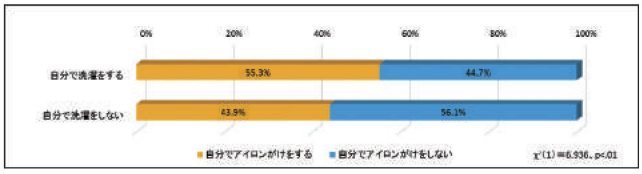

図6：洗濯とアイロンがけ

表3：衣服管理に関する名称の認知度

	衣替え	虫干し	のりづけ	しみ抜き
知っている	96%	23%	44%	90%
知らない	4%	77%	56%	10%

表4：衣服管理の実施状況

	衣替え	虫干し	のりづけ	しみ抜き
したことがある	85%	6%	7%	43%
したことがない	14%	93%	92%	56%
未記入	1%	1%	1%	1%

以上のことから、洗濯、しみ抜き、アイロンがけといった基本的な衣服管理は約4割の調査対象者が自分で行っていることが分かった。しかし、学生が着用しているカジュアルウェアでは必要性が低いと考えられるのりづけや虫干しについては実施率が低く、認知度も低いといえる。

さらに、調査対象者を家政系に所属する学生とその他の学生に分け、衣服管理用語の認知状況に差がみられるか検討した。その結果が図7である。衣替え、虫干し、のりづけ、しみ抜き全ての用語で差が認められ、家政系学生の認知度はその他の学生に比べて高かった。

また、衣服管理の実施状況についても同様の検討を行ったところ、衣替え、虫干し、しみ抜きで差が認められ、図8に示すように家政系で学ぶ学生がより多く実施していた。のりづけについては差がみられなかった。

3.2 衣服補修に関するアンケート調査結果

衣服補修用具の所有状況を、図9に示した。あると回答した調査対象者が81%となり、高い割合で補修用具を所有していた。また、所有している補修用具の内容は、図10に示したようにミシンを含む裁縫用具一式を所有している59%、ミシンはないが裁縫用具を所有している13%、針・糸・小ばさみ程度の裁縫用具を所有している6%であった。

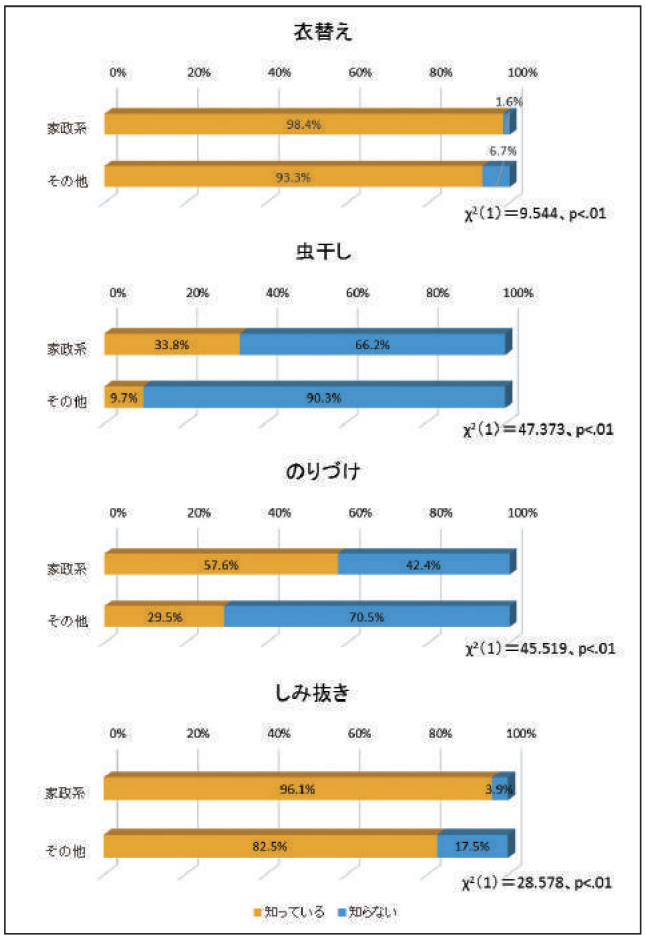

図7：衣服管理に関する用語の認知状況　－家政系学生とその他学生との比較－

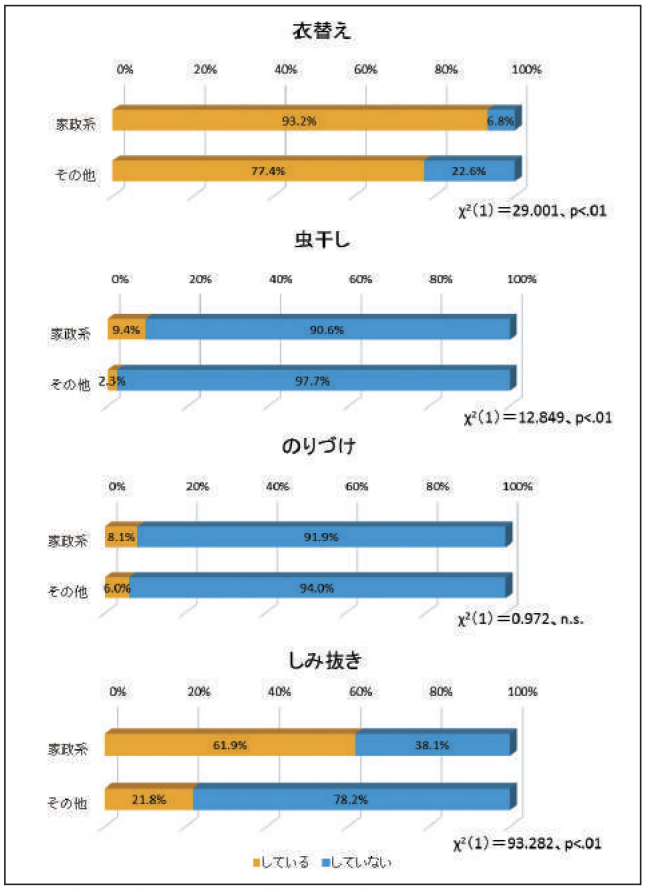

図8：衣服管理の実施状況　－家政系学生とその他学生との比較－

次に、実際に補修が必要になった場合の対応について調査した結果が図11～16である。

ホックやボタンが取れた場合は、図11の通り自分で付け直す（60%）が多く、次いで家族に付け直してもらう（33%）であった。

また、ファスナーが壊れた場合を図12に示した。処分する調査対象者が27%で最も多く、家族に付け直してもらう（21%）、自分で付け直す（18%）、使わないが保管しておく（15%）の順となった。ファスナーの補修はボタンやホック付けに比べて難度が高いため、家庭で補修することが少ないと考えられる。

裾上げが必要な場合や丈を直す場合は、図13のように購入店で直してもらう（44%）が最も多く、専門店などに出して直してもらう（6%）を含め半数が店で直していることが分かった。

裾がほつれた場合は、図14のように自分で直す37%、家族に直してもらう35%となり、家庭で補修されることが多かった。なお、そのまま使う（14%）場合もみられた。

衣服に穴が開いた場合は、図15の通り自分で直す（20%）、家族に直してもらう（18%）など家庭で補修する調査対象者が合計42%であったが、処分する（44%）が最も多くを占めた。処分するかどうかの判断は、損傷箇所や大きさ、素材、価格なども影響してくると考えられる。

最後に、サイズが合わない場合を図16に示した。人に譲る（38%）が最も多く、次いで処分する（24%）、リサイクルショップへ出す（20%）、使わないがそのまま保管しておく（10%）という順であった。処分するが4分の1近くを占めたのは、比較的低価格な衣服を短いサイクルで消費する消費行動を反映した結果であると考える。

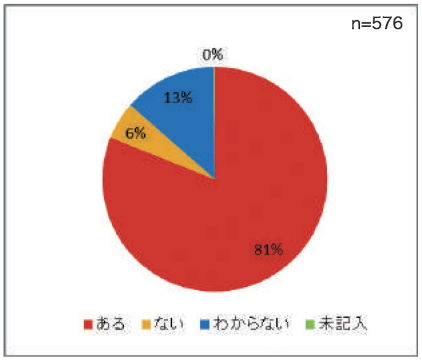

図9：補修用具の所有状況

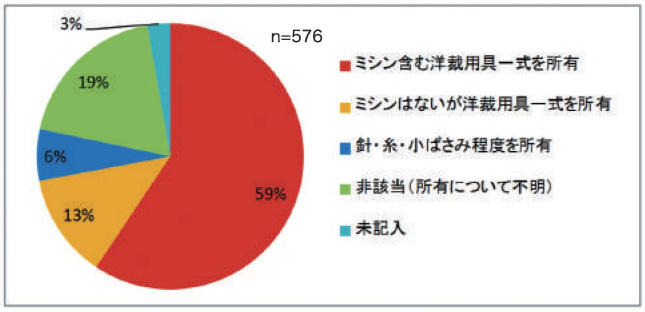

図10：所有している補修用具

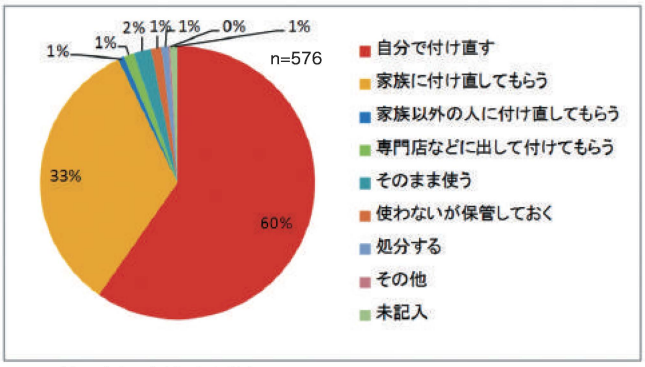

図11:ボタンやホックが取れた場合

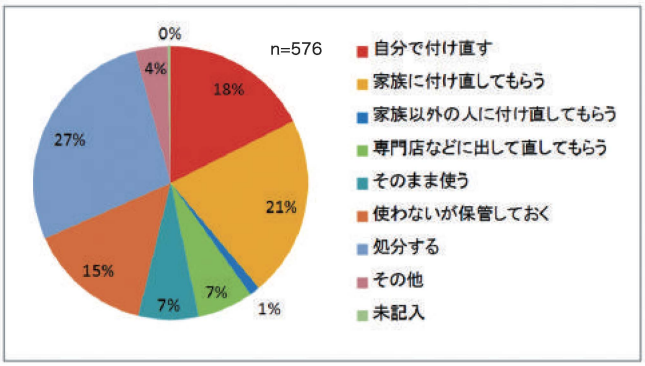

図12:ファスナーが壊れた場合

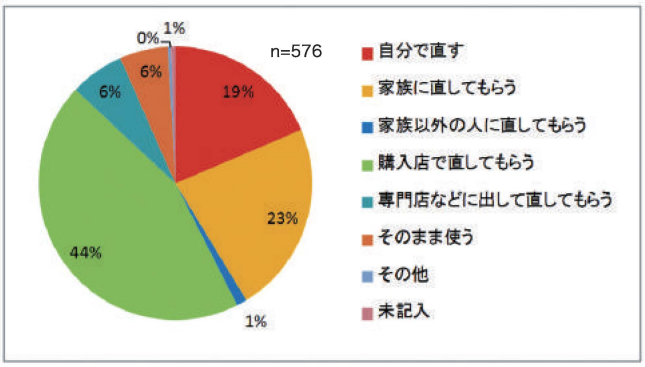

図13:裾の丈を直す場合

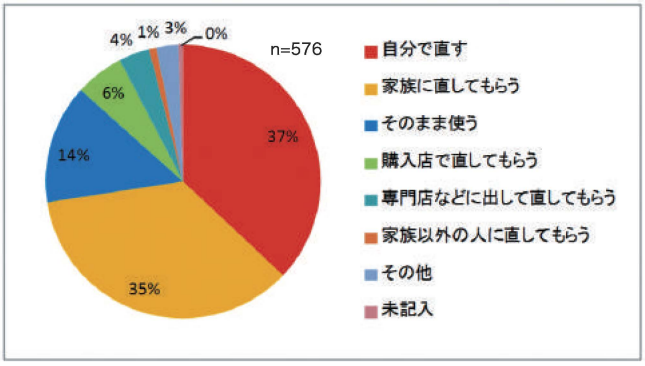

図14:裾がほつれた場合

次に、衣服補修関連用語認知度の調査結果を表5に示した。ボタン付け91%、まつり縫いは63%と高い認知度となったが、かけつぎ(10%)はあまり知られていなかった。さらに、実施状況を調査したところ、表6に示したようにボタン付け78%、まつり縫い61%、かけつぎ3%という結果であった。ボタン付けは認知度は高いが、知っていても実施した経験がない調査対象者がいるのに対し、まつり縫いは、認知度と実施状況がほぼ同じ割合であった。

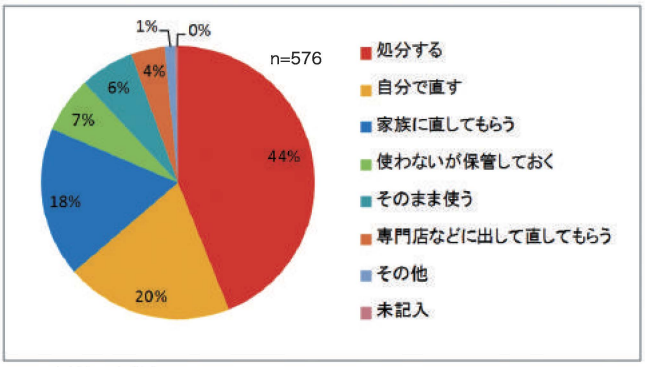

図15:穴があいた場合

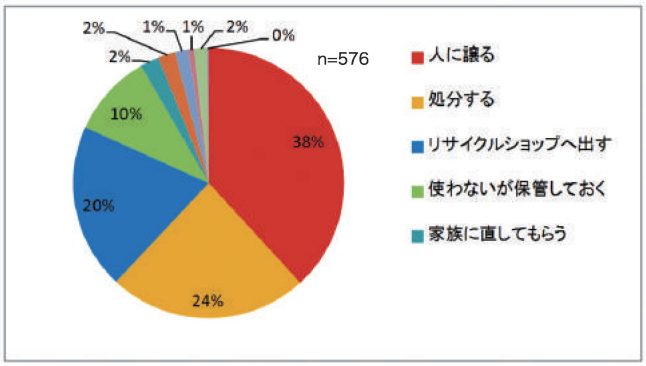

図16:サイズが合わなくなった場合

表5:衣服補修に関する名称の認知度　n=576

	まつり	ボタン付け	かけつぎ
知っている	63%	91%	10%
知らない	37%	9%	90%

表6:衣服補修の実施状況　n=576

	まつり	ボタン付け	かけつぎ
したことがある	61%	78%	3%
したことがない	38%	21%	96%
未記入	1%	1%	1%

中学校・高等学校での衣服実習の経験を調査した結果が表7である。中学校では68%、高等学校では36%が衣服に関する実習を行っていた。その内容として、中学校ではエプロンやカバン類の製作が多く、ミシン縫いや手縫い、ボタン付けなどの縫製方法を経験している調査対象者が多かった。また、高等学校では、洋服や和服などの製作経験がある調査対象者も存在したが、中学校と同じく基本的な縫製方法の実習や小物の製作、エプロン製作が多かった。

高等学校では特に、普通科と家政系の学科の違いから、実習内容の差が大きく、衣服(洋服)製作を経験していない調査対象者が多く存在することが分かった。

表7：中学校・高等学校での衣服実習経験

	ある	ない	覚えていない	未記入
中学校での実習経験	68%	32%	0%	0%
高等学校での実習経験	36%	62%	1%	1%

次に、高等学校での衣服実習経験と、衣服補修用具の所有率との関連を図17に示した。χ^2検定を行ったところ、有意確率1%で差が認められ、高等学校で衣服実習を経験している調査対象者は、衣服補修用具の所有率が高かった。

なお、中学校での衣服実習経験の有無と衣服補修用具の所持との間には有意な差はみられなかった。

また、所有する衣服補修用具と補修実施状況との関係を図18、図19に示した。χ^2検定を行ったところ、「まつり縫い」「ボタン付け」で有意確率1%で差が認められた。さらに表8、表9の残差分析結果より、ミシンを含む洋裁道具一式を所持している調査対象者は、「まつり縫い」、「ボタン付け」を実施している場合が多いことが分かった。まつり縫い、ボタン付けはいずれもミシンを使用しない補修方法であるが、ミシンを所有している調査対象者は普段から洋裁に親しんでいるため、衣服補修を多く実施しているものと推察される。

次に、衣服補修用語認知状況と実施状況について、大学で家政系学生とその他学生との関連を図20に示した。χ^2検定を行ったところ、補修用語認知状況では、「まつり縫い」「ボタン付け」において有意確率1%で両者に差が認められ、家政系の学生の認知度が高かった。

また、図21に示したように実施状況についても同様に「まつり縫い」「ボタン付け」で差が認められ、家政系で学ぶ学生はそうでない学生に比べて「まつり縫い」、「ボタン付け」の用語の認知度が高いだけでなく、実施している学生も多かった。

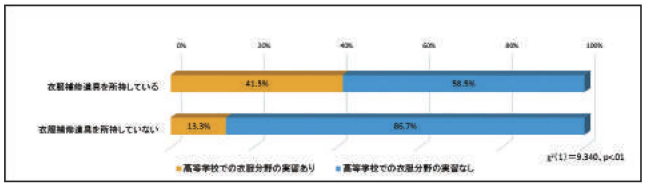

図17：高等学校での衣服実習経験と衣服補修道具の所有

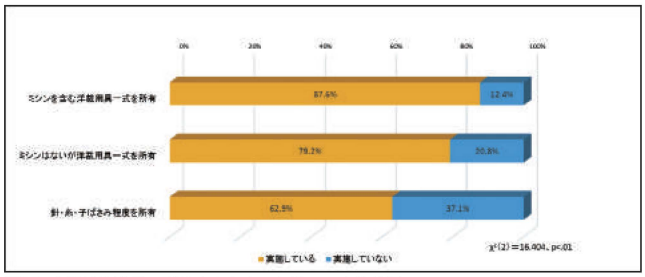

図18：衣服補修道具の所持内容とまつり縫いの実施状況

表8：衣服補修道具の所有内容とまつり縫い実施状況の残差分析結果

残差分析結果	実施状況（まつり縫い）	
	している	していない
ミシンを含む洋裁用具一式を所有	3.9**	−3.9**
ミシンはないが洋裁用具一式を所有	−0.8	0.8
針・糸・小ばさみ程度を所有	−5.2**	5.2**

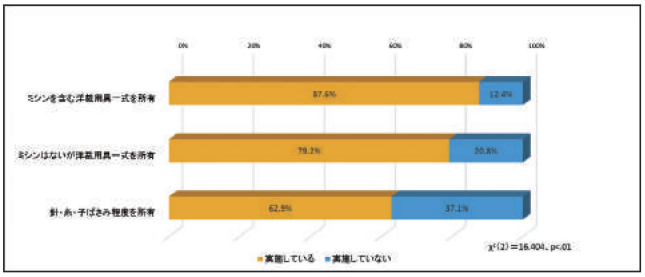

図19：衣服補修道具の所持内容とボタン付けの実施状況

表9：衣服補修道具の所有内容とボタン付け実施状況の残差分析結果

残差分析結果	実施状況（ボタン付け）	
	している	していない
ミシンを含む洋裁用具一式を所有	3.4**	−3.4**
ミシンはないが洋裁用具一式を所有	−1.3	1.3
針・糸・小ばさみ程度を所有	−3.6**	3.6**

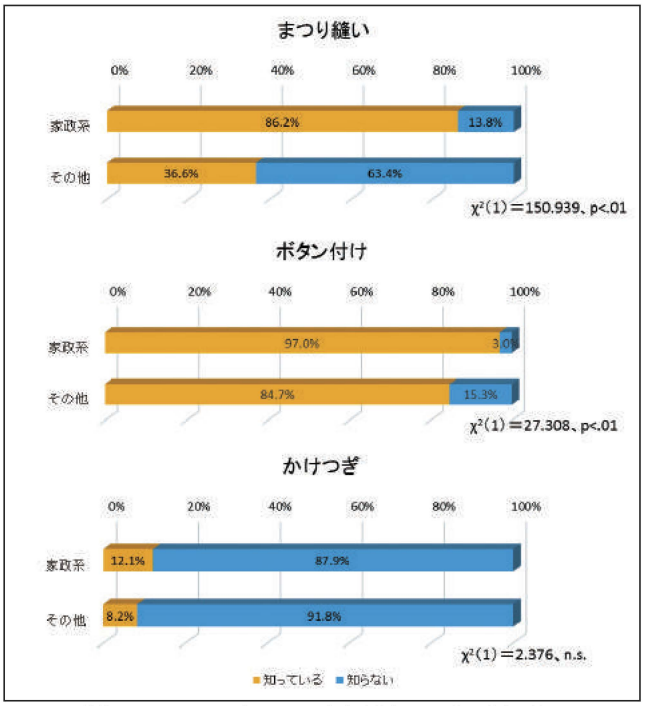

図20：衣服補修に関する用語の認知状況　－家政系学生とその他の学生比較－

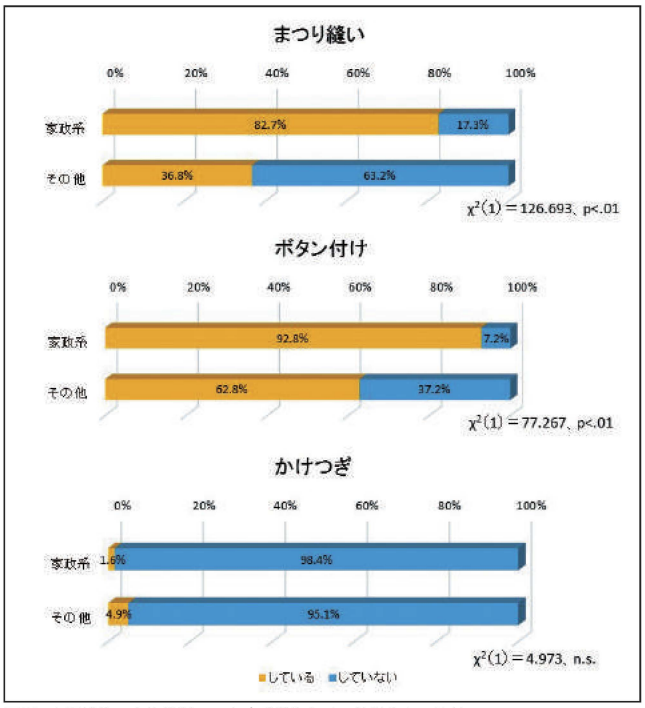

図21：衣服補修の実施状況　－家政系学生とその他学生との比較－

4 まとめ

東海地区における大学生の衣服管理状況を把握するため実態調査を行った結果、以下のことが分かった。

1. 調査対象者の38%が自分で洗濯をしており、親や兄弟と同居であっても、自分で洗濯している場合もみられた。また、クリーニング店利用の有無については、62%の調査対象者が利用していると回答し、冬のコートでの利用が多かった。
2. 衣服へのアイロンがけは、約半数が自分で行っており、そのアイテムはシャツ・ブラウスが81%と最も多かった。
3. 調査対象者の居住状況とクリーニング店利用との関連についてχ^2検定を行った結果、有意確率1%で居住状況による差が認められ、一人暮らしの調査対象者はそれ以外の調査対象者と比べてクリーニングを利用しない傾向がみられた。また。洗濯とアイロンがけの実施についても有意確率1%で差がみられ、自分で洗濯をしている場合にはアイロンがけも自分で行う場合が多かった。
4. 衣服管理用語の認知状況とその実施状況について、大学、短期大学で家政系に所属する学生とそうでない学生の比較を行った結果、衣替え、しみ抜きは家政系の学生がより多く実施していた。これに対して虫干し、のりづけについては差がみられず、学生のカジュアルウェアに施すことは少ないと考えられるのりづけや虫干しは実施率が低く、認知度も低いことが分かった。
5. 衣服補修の実施状況を調査したところ、ボタン付け、まつり縫いでは7割程度実施されていた。
6. 補修が必要な場合、ボタンやホックは自分で付け直す場合が多いが、ファスナーが壊れた場合や穴が開いた場合には、処分する調査対象者も多く、低価格な衣服を短いサイクルで消費する消費活動を反映する結果となった。
7. 衣服補修用具の所持については、高等学校で被服実習を経験している場合にはそうでない場合に比べて所有している調査対象者が多かった。所有内容では、ミシンを含む裁縫用具一式を所有している調査対象者が59%と多く、ミシンを所有している調査対象者はまつり縫い、ボタン付けの実施も有意に多かった。
8. 衣服の補修技法に関する名称の認知度を調査した結果、ボタン付けは91%、まつり縫いは63%となったが、かけつぎは10%とわずかであった。また、衣服補修用語認知状況と実施状況について、大学、短期大学で家政系に所属する学生とそうでない学生の比較を行った結果、まつり縫い、ボタン付けにおいて、家政系で学ぶ学生は用語認知者、実施者ともに多かった。
9. 衣服補修用具の所有状況については、高等学校で被服実習を経験している調査対象者はそうでない調査対象者に比べて所有者が多く、ミシンを所有している調査対象者はまつり縫い、ボタン付けの実施者も多かった。

今回の調査により、これまでは消費者として常識であった衣服の管理・補修に関する知識や実施が減少している現状を知ることができた。その原因は、着用期間の短期化や、家庭科の衣服関連学習の減少などが考えられる。ファストファッションの人気は未だ高く、長期着用されにくい商品が今後も市場に多く出回ることが予想される。また、家庭科教育の学習内容減少も加わり、消費者が衣服を正しく管理・補修するための知識を得る機会が失われている現状も危惧される。

一方で、大切な1着を長く着用することや、愛着のある衣服を補修しながら受け継ぐなど、失われつつある文化を大切にする動きも見られる。環境への配慮が謳われる現代では、このような動きの拡大も期待されるが、全ての消費者が同じ考えを持つことは難しく、衣服に対する考えは多様化していくであろう。

今後は、多様な層の消費者が正しい知識を身に付け、限られた資源を大切する意識を高めるため、雑誌やCMなどのメディアを活用し、これまでとは異なった場面での消費者教育を行う必要があるのではないかと考える。

さらに、今後アパレルで活躍する学生を教育する立場から、環境への影響を考えた商品計画ができるデザイナーや、正しい取扱い方法を消費者へ説明できるテキスタイルアドバイザーを育てる大切さを再確認する機会となった。

参考文献
[1]鷲津かの子，水嶋丸美，安藤文子，宮本教雄，伊藤きよ子；ファストファッション製品の使用状況と着用後の処分方法に関する調査， 繊維製品消費科学会誌， 57 (5)，pp. 59-64，2016
[2]天野ゆか，岩佐和代；所持衣服と管理実態，椙山女学園大学研究論集（自然科学篇）(38)，pp113-123，2007
[3]岩佐和代；椙大生の衣服管理と死蔵衣服， 椙山女学園大学研究論集（自然科学篇）(42)，pp35-44，2011